

2018年

12月10日
第321号

ゆうあい通信

発行所 石井記念友愛園

宮崎県児湯郡木城町椎木644番地1

〒884-0102 TEL 0983-32-2025

憂患（ゆうかん）に生じ安楽に死する 孟子

園長 児嶋 草次郎

雲ひとつなく、まばゆい太陽の心地よい光に包まれて、11月23日（金）、今年の収穫感謝祭も盛大に行われました。石井記念友愛園を初め、石井記念友愛社の経営する保育園10か園、それに障がい者通所施設茶臼原自然芸術館、計12園の共同主催です。1年の中で一番大がかりな石井記念友愛社の行事で、毎年1500人以上の人々が集います。

目的は一つ、この1年の恵みと平和への感謝を表明することです。天（神）に対して、この大自然に対して、そしてこの石井記念友愛社の各事業と利用者の方々を支え守ってくださっている多くの方々に対してです。「ありがとうございます」。

戦後の石井記念友愛社の歴史の中で、この勤労感謝の日を収穫感謝祭として行事化したのは、私がかこの責任者になってからです。戦前の歴史的な価値を否定することから戦後はスタートしていますし、11月にそのような行事をする余裕もなく時は流れていました。本来この日は新嘗祭（にいなめさい）と言って、天皇が日本国民を代表して天（神）に収穫を感謝し祝う日です。

この茶臼原の大自然の恩恵を受けながら生活しているのに、大人の私たちがなんの感謝も表明しないことは、日本人としては恥ずかしいことであり（この近辺は開拓地であり神社もお寺もありません）、子供たちの感性（感謝の気持）も育つはずありません。私が職員たちに声かけして、ささやかながら友愛園独自に収穫感謝祭を始めたのがスタートなのです。今から35年くらい前だったでしょうか。

最初は、牛車（チキチキバンバン号）を舞台にして、その上で挨拶したのをおぼえています。招待したのは学校の先生方でした。その後、次々に保育園も加わるようになり盛大となっていきました。今のような形になったのは20年ほど前、石井記念友愛園園舎を新しく改築してからです。

友愛園で職員と子供たちみんなで作ったお米や野菜類を使って、何種類か料理を作り、来ていただいた方々に無料で振る舞い楽しんでいただきます。飲んで（お茶かジュース）食べて歓談し合う園遊会が始まると各テント前は長蛇の列となります。

各保育園の子供たちが、夏頃からこの大自然のもたらした木の枝や木の実などを使って時間をかけて作った作品群も見ものです。「天と自然への感謝展」と看板を掲げて、クリスマス前まで展示します。もう 20 年以上の歴史を積み重ねており一つの子供の文化として育てています。感性の教育の一つの結実です。見られていない方はぜひ見てください。

私のこの数年の楽しみは、友愛広場で行われる子供たちの出しものです。ひかり保育園は創作遊戯、のゆり保育園は和太鼓、空手演武はひかり保育園・やまばと保育園・友愛園、有隣園の子供たちが見せてくれました。1年ぶりに見る姿です。名前は分からないのだけど、1年前に比べてすごく成長し、光っている姿を見つけた時は感涙しそうになります。それから、その子供のこれからの人生を妄想したりします。園遊会の間、私はぶらりぶらりと歩き回り、なつかしい人と再会することを楽しみとしています。今年も何人かと挨拶を交し歓談することができました。皆様、この1年大変お世話になりありがとうございました。

その妄想は現在も続いていまして、石井記念のゆり保育園の移転改築問題（来年度）とからませながら、新たな石井記念友愛社の使命へと発展させるべく、今、イメージをふくらませています。今回は、そのことを書かせていただきます。頭でイメージし、それを文字化し、一步踏み出すことで物事は具現化していくのです。

石井記念のゆり保育園は昭和 33 年に、石井記念友愛社としては石井記念ひかり保育園（昭和 29 年設立）に続いて 2 番目に、地域の農家の方々のお子さんの命と安心・安全を守るために開かれました。つまり、ひかり保育園は、戦後、新生日本を作るため全国各地からこの茶臼原大地に入られた約 300 戸の開拓農家に向けて、のゆり保育園は石井十次の理想郷作りのため、やはり全国各地出身の優秀な岡山孤児院出身者たちが戦士となるべく独立した農家に向けて開設。目的は一緒でした。

開墾作業は甘いものではなく、家族総出で粉骨砕身、日の出から夜まで働かねば食べてはいけなかったのです。放置された赤ん坊に事故が起きようになり、農家の方々の強い要望に応えたものでした。

その後戦後 70 年が過ぎ去り、のゆり保育園もひかり保育園も、当初の使命はずでに終えています。開拓地は過疎化し、今保育園を利用している子供たちのほとんどは地域外から通って来ているのです。

石井記念友愛社の敷地は約 35 ヘクタールで、木城町と西都市にまたがっています。二つの保育園は二つとも西都市側に建っており、西都市の管轄となっています。のゆり保育園の移転というのは、本部のある木城町側に移すということなのです。実はのゆり保育園を現在利用している子供はほとんどが木城町内から通って来ているのです。言わば現在は越境保育。移転したら、木城町役場と価値を共有しながら

ら、木城町民のニーズにキチンと向き合っていくという形になります。

そのニーズに答えるとはどういうことか。今、色々と考えています。

まず、保育園から幼保連携型の認定子供園とすること。木城町内には幼稚園がなく、認定子供園化することで、今まで保育園を利用できなかった人たちも受入れることができるようになります。その中には、友愛園の幼児さんも含まれます。施設内の保育だけではなかなか社会性が育ちにくく、昔、目と鼻の先の、のゆり保育園に遊びに行かせていて、県当局から厳しく叱られたことがあります。二重措置になるというのです。長い間の課題でしたが、認定子供園化すれば堂々と通うことができるようになります。今後「のゆり」と共生し合って、幼児さんを養育・教育することができるようになれば、幼児さんにとっては大きなメリットとなります。

今、養育・教育と書きましたが、認定子供園化することは、幼稚園の「教育」を取り入れるということにもなります。ここが大きな課題です。すでに保育園には教育が取り入れられているとも言えなくもないのですが、私は違った次元のことを考えています。

宮崎県は農業県ですが、自由貿易が加速化される時代状況の中で、農業と言えども世界の人々と戦っていかねばならない時代です。つまり、すべての分野において今やグローバル化が進んでおり、若い親御さん方は、我が子が世界にはばたける人間に育ててほしいという強い思いを持っておられるのではないかと。私たち社会的養護・養育の世界も、今、急速にアメリカナイズされつつあり、そういう価値観と戦っていける子供たちを今後育てることも一つの課題となって来ています。

戦っていくためにまず身につけておくべきことと言えば、やはり英語力でしょう。そうです。「のゆり」が再スタートするにおいて取り入れるべき教育とは、英語教育ではないかと考え始めているのです。あの明治時代、石井十次は、施設内に学校を設立しましたが、それにプラスして夜間に英語教室も一時期やっています。グローバル人材を育てていたのです。だから、アメリカに留学したり就職したりした卒業生も輩出できたのです。その志に一步近づきたいという思いもあります。

本屋で偶然に、中山貴美子さんという方が書かれた「奇跡の英語保育園」という本を見つけました。氏は我が子に英語力を身につけさせようとするのですが、日本のインターナショナルスクールで学んで子供が「無国籍な異邦人化」している現実を見て、独力で英語を身につける「保育園」を作ってしまったのです。今ではカナダ等にまで進出し、その中の「人の心を育む集団行動教育」がカナダ人に評判になっているとか。

氏の本の中で共鳴した部分をいくつか紹介させていただきます。

「人間の耳は、5歳でその音域が決まるといわれています。『絶対音感』は5歳ま

でに身に付かなければ生涯身に付かない』と言われる理由はそこにあります。」「音楽もそうですが、語学もこの時期までに慣れ親しまない限り、容易に身に付くとは考え難いのです。」

「日常的に英語を聞くだけで自然と身に付く一語学習得とは非常にシンプルなものです。」

「欧米の教育では集団行動に重きを置きませんが、日本では幼稚園から集団で行動することを学びます。個性を大切にする欧米の教育、協調性を育む日本の教育、いずれも長所と短所がありますが、私は日本人のアイデンティティーを大切に考えて、カリキュラムにさまざまな集団教育を加えました。」

「こうした集団行動は、『他人に迷惑をかけない』『自分の行動に責任を持つ』『みんなのための自分の役割を知る』などの学びになります。」

「欧米の幼稚園の多くでは、子供たちを自由に遊ばせています。カリキュラムに教育的な要素を組み込むケースはほとんどなく、就学前の子供たちは遊ばせることこそが大事と考えているからです。」「一方、日本では、教育的要素をカリキュラムに加える幼稚園が増えてきました。」

「何事にも礼節を重んじる日本人の気質を堅苦しいと見る傾向もありますが、礼儀正しく気持ちが良いと感じる、それが日本人のアイデンティティーです。」「周りの気持ちを慮る『しつけ』と『マナー』の教育を徹底します。」

「育てたいのは『グローバルな感覚を持った日本人です』。」

『『早期英語教育』と『人の心を育む集団行動教育』、そして『マナー』までも学べる幼稚園は、カナダ人の保護者に新鮮な驚きを与えたようです。』

引用が長くなりました。なるほどと思います。こういう考えのことを、誰かが言っていました。グローバル（グローバル＋ローカル）主義というのかもしれませんが。こういう考え方から言えば、私たち社会的養護・養育の世界の養育指針や「ビジョン」等は、すでにアメリカナイズされているともいえるのでしょう。施設における集団行動教育的な指導を、極力排除しようとしているからです。

こんなことをアレコレ考えている時、12月4日（火）、先日、友愛社から大学進学する子供たちのためにと100万円寄付してくださった宮崎市の香月保基（やすもと）様御夫妻が来園され、次のような話をされびっくりしました。綾のワイナリーとぶどう畑を見せていただいた時に、「将来、この農園で友愛園卒園生が働かせていただけるとよいですね」と、こちらの願望を表明したことに対する答えなのでしょう。

「来年から、友愛園の子供を2名ずつ、ニュージーランドのぶどう園に研修で派遣したい。」

現在綾でワイナリーを経営されている長男の克公（よしただ）様は、ニュージーランドでぶどう栽培技術や醸造技術について5年以上学ばれたそうです。英語が自由に話せるようになるためには3年かかるとも言っておられました。

ありがたい話ではありますが、私は2、3年待つてくださいと返事をしました。子供たちのその方向への志を養うには、何年かかかります。農業に興味を持つ子はけっこういますが、外国で学ぼうという意欲を持っている子はまだいません。これから養っていかねばなりません。

私たちの予想以上に、グローバル化は早く進んでいるようです。平成の次の時代、グローバル人間を養成することも石井記念友愛社の新たな使命になりそうです。

最後に、香月様が教えてくださった孟子の言葉をここに書き写しておきます。

「天の将（まさ）に大任を是（こ）の人に降（くだ）さんとするや、必ず先ず其の心志を苦しめ、其の筋骨を勞せしめ、其の体膚（たいふ）を飢えしめ、其の身を空乏（くうぼう）にし、行（ぎょう）其の為す所に佞乱（ふつらん）す。」